

Ⅶ 授業改善にかかわる研修

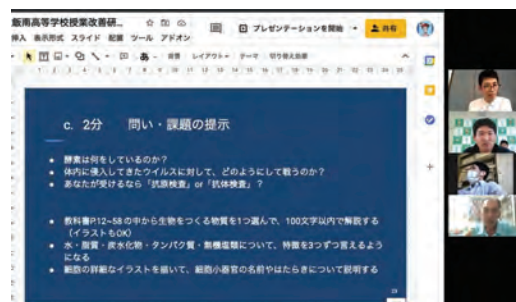
1 「主体的・対話的で深い学び」のための授業改善研修会

(1) 目的

生徒の対話を促す授業について実践例をもとに学び、その工夫点や授業デザインについて情報交換をしながら理解を深める。また、日々の授業における効果的なICT活用や問いづくりについて、今後自らの授業で実践していけるヒントを得る。

(2) 内容

7月5日(月)、神奈川県相洋中学・高等学校の斉藤友昭先生を講師として、Zoomを使用したオンライン研修を行った。生徒に今後の授業展開を予想させる取組や、ペアワークを授業内にちりばめて対話を促していく手法など、日々試行錯誤を続けられている斉藤先生から実践を通して得られた効果や反省点など事例をもとにうかがった。そして本校教員と日々の授業実践について意見交換をしながら、生徒の成長を促していくための授業について考えを深めあった。



(3) 検証

日頃の授業で生徒の疑問(問い)を集約し、それを生徒と共有して考えていくことが問いづくりの練習になると理解できた。すでに校内で実践している教員もいるが、ICTを使ってその集約を簡略化させ、生徒へのフィードバックが容易に行えることを学んだ。今回の斉藤先生の事例にあった、生徒による本時の内容の予想講義については教員アンケートでも反響が大きく、実際生徒にさせてみることでこれまで以上に授業への意欲的参加がみられたとの声があった。このように、研修で数多くの事例を学びその意図について交流することで、新たな授業改善に取り組む教員がみられた。

2 本校卒業生による活動報告会および飯南高校と共に未来を拓く地域活性化セミナー

(1) 目的

生徒が自らのテーマを追究し続けるための働きかけについて、卒業生の報告により地域を学び場にした探究活動の在り方について考える。また、教育と地域との連携で、地域の未来をともにつくることの大切さを理解する。

(2) 内容

11月26日(金)放課後、大正大学地域創生学部の浦崎太郎教授と、本校卒業生であり地域創生学部2年生の平野彩音さんを招いて活動報告会を実施した。

まず、平野さんから高校在学中の3年間でどのように地域での活動に興味を持ち、体験を重ねて成長していったのか報告していただいた。平野さんはいいなんゼミで「空き家片付けプロジェクト」を実施し、その学びを通して大正大学への進学を決意した。ただし当初から地域活動を積極的にやりたかったわけではなく、社会科学入門での高大連携授業で地域を考えたことや、課外活動で県内外の高校生や大学生、大人たちとの交流を繰り返して、自分なら何ができるのか考えたり他地域と比較したりしながら、自分の取り組みたいテーマが見つかっていったことが語られた。また、やりたいことについて地域の大人へ相談し、丁寧に伴走してもらったことで現在のように自走することができたと話があった。

浦崎先生からは、本校の取組が新学習指導要領に沿った学びの活動であり、教科学習と探究とが有機的に繋がっている事例であると解説いただいた。また、探究はデート、恋の視点での捉え方との話があり、「恋愛が始まるのは人それぞれなので、生徒がすぐに動き出さなくても心配はいらない。高校時代に自ら社会に関わっていく経験や、出会いの場（声をかけてもらう機会）を増やすことが大切」とコメントいただいた。

夜は飯南産業文化センターへ会場を移し、本校活性化協議会、学校運営協議会および地域人材育成コンソーシアム・いいなん主催の地域活性化セミナーが行われた。ここでも引き続き平野さんと浦崎先生からの活動報告があり、平野さんからは高校時代の活動を通して、「当り前のことが当り前ではないことに気づいた」、「成功事例ばかり当初は調べていたが、地域に活動をしに行ったら私の学びが大きく変化した」と報告があった。浦崎先生からは、「飯南飯高では、皆で井戸を掘って泉が湧き、オアシスが生まれた。ただこのオアシスの光景はいつ消えてしまっても不思議ではないものである。若者はどんなまちを選ぶのかを考えて、だとしたら地域の皆さんがやるべきことはなんだろうか」という問いを投げかけていただいた。

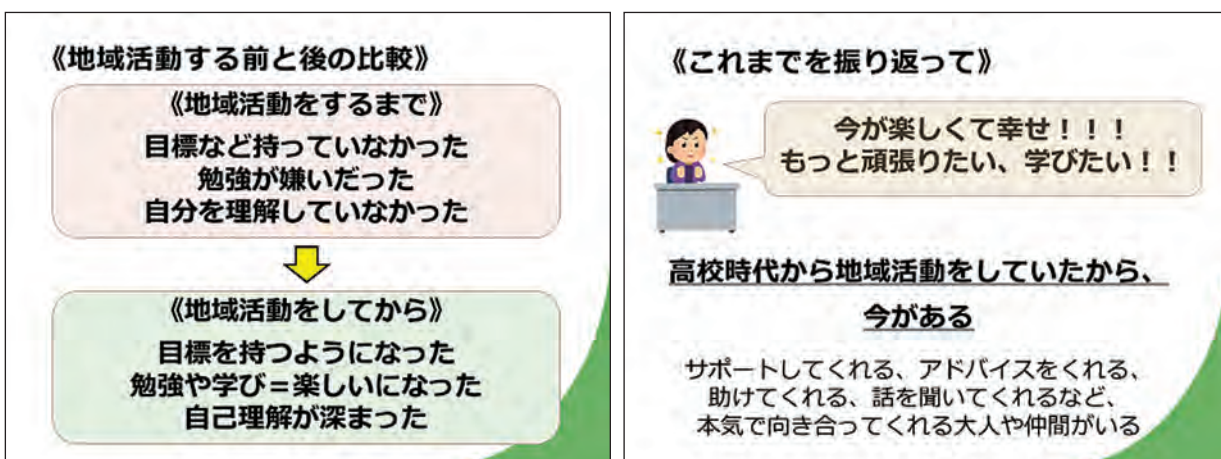


また、地域おこし協力隊の高杉亮さんからは、本校生徒との関わりについて具体的にお話いただいた。その中で「高校生が卒業してからも関われる場づくりを考えていきたい」というお話があり、卒業生が関われる受け皿を作る動きが進んでいることも地域の中で共有された。

(3) 検証

高校時代に地域で活動を重ね、今でも地域をより良くしたいと学び続けている卒業生の姿を見て、学校と地域とが協働して自分らしく社会に参加する力を付ける教育を行った結果、自走する若者が登場し、結果的に若者が地域と関係する存在になっていくことが実感できた。国事業採択当初、地域課題の解決ありきで進めてしまっていた部分は否めないが、そうではなく、地域のことを自分ごととして捉え、そこに自分軸ができることで自走していくのではないかと感じられた。

また、これまでの本校の取組が小規模校の活性化という狭い枠ではなく、新学習指導要領に示された育成を目指す生徒像を愚直に追究している取組であることが地域とも共有された。このことで、学校と地域とが一体となって生徒を育てていく雰囲気が、より一層強固になるものと考えられる。



※平野さんの発表スライドより抜粋

3 「数学Ⅰ」三角比を用いた身の回りのものの高さの測定

(1) 目的

高さ等の測定については、数学の授業において簡単な場合を問題で学んでいる。しかし机上の考察だけでは、生徒は三角比の有用性をなかなか実感できないであろう。今回は、身近な校舎の高さやハナノキの高さ、並木道の水平距離と垂直距離を測定することで、三角比の有用性を実感させることを目的とする。

(2) 内容

まず、前時にものを見上げる角度（仰角）や斜面の角度を測る方法を考察し、角度測定器やペットボトルを用いた斜面の角度測定を考えた。クラスを3つの班に分けて調査対象も割り当て、班の中での役割を細かく決めた。また、T Tの教員（連携中学校の数学教員）と本校の数学教員が各班へサポートに入った。

(3) 検証

今回測定を実施したクラスは、数学の定期考査の平均点は他のクラスより低い、授業へ積極的に参加する生徒が多い。そのため、このような活動で数学の有用さや楽しさが伝わればと思い、この授業を企画した。数学の得手、不得手にかかわらず、多くの生徒が積極的に測量に参加し、測定結果が出ると驚きの声や充実感のある顔をしていた。測定結果については、校舎の高さは実測値とほぼ差がなく測定することができたが、ハナノキの高さは大きく差が出る結果となった。班の中ではなぜ測定値が大きくずれたのかを検証しており、斜面に立ったことや、頂点が分かりにくいことなどを挙げていた。測定がうまくいかなかった班も含め、とても前向きに実験ができたと思う。反省としては、授業時間が足らず、振り返りや他の班の測定結果を深く共有することができなかったことである。次年度以降は、実施する際に2時間分の授業時間を確保して計画をしたいと考えている。



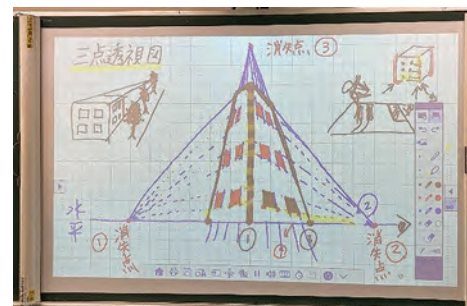
4 「造園計画」における図面製作でのICT活用

(1) 目的

造園計画では「造園製図」と「造園デザイン」の基礎について学ぶ単元があり、庭園の完成図を表現する「透視図法」の書き方を理解する。図面を完成させるためにはポイントとなる位置取りを正確に伝えることが重要となるため、プロジェクターによる方眼紙を利用することで、的確に図面作成の方法を理解する。

(2) 内容

生徒にはマス目の入った方眼用紙を配り、線の引く場所やポイントの位置取りについてプロジェクターによる方眼紙を利用して説明した。生徒は配布された方眼用紙に図面を作成し、教員はICT機器を使用して補足や説明を行った。



(3) 検証

黒板では表現しきれないマス目の正確さにより、生徒たちは何番目のどの場所に線を引けばよいのか具体的に理解することができた。これは図面製作では重要なポイントであるため、ICTを活用することでの的確に指導することができた。また、色を使い分けるときや線の引き間違いがあった場合、線を消してもマス目が残っていることが最大のメリットであり、生徒の理解度も格段に上がったものと考えられる。生徒の感想には、「大変わかりやすかった」とあり好評であった。

5 英語プレゼンテーションの動画提出

(1) 目的

英語に苦手意識を持ち、授業に主体的に取り組もうという姿勢になれない生徒が多い。また、学力差も大きく、中学の基礎がある程度できている生徒がいる一方、アルファベットに不安がある生徒もいる。より英語に親しみ、不安感のない環境を作り出すため、Google Classroom にプレゼンテーションを動画として投稿する取組を始めた。

(2) 内容

プレゼンテーションの原稿作りでは、翻訳アプリケーションを使用することで英語授業への不安感を薄めることを意識した。生徒の学力に応じて英文の難易度や長さにもある程度融通をきかせ、生徒がそれぞれのペースで学習を進められるよう配慮した。その後、生徒は授業内で原稿を読む練習を重ね、各自が自宅等で動画を撮影して Google Classroom へ動画投稿を行った。

(3) 検証

クラスメイトに見られているという過度の緊張感がなく、失敗してもやり直しができるという安心感からか、全体的にこやかな生徒の表情が印象的であった。また、口数の少ない生徒が感情豊かにカメラに語りかけている姿には驚かされた。ただでさえ緊張を強いられるプレゼンテーションを苦手な英語で行うことは、生徒にとって大きなストレスとなる。Google Classroom を利用し、英語プレゼンテーションへのハードルを下げることは、生徒の学習意欲向上に一定の効果があると実感できた。また、教室でのプレゼンテーションでは見せることのできないものを、実際に見せながら話すことができるというメリットも動画投稿にはあると感じた。教員側がテーマ設定を工夫することで、さらに面白い取り組みとなる可能性を感じている。



6 ICTを用いた生徒の問いの集約

(1) 目的

授業での疑問や気づきをまとめ、全体共有することでクラス内の関心度合いを確認し、次回の授業の目的や活動へと繋げる。また、日常的に無理なくICTを活用し、効率よく生徒の意見を集約することを目指す。

(2) 内容

授業後に Google フォームを使用し、生徒に疑問や気づいたことを提出させる。その内容をまとめ、次の授業冒頭で示して学びの目線を合わせる。また、疑問を多数紹介することでどのような問いがよいのか示し、探究に繋がる問いづくりの経験を増やす。

(3) 検証

一昨年の授業改善研修会では、ユマニテク短期大学鈴木建生学長から「生徒の質問や疑問は今後の教材化にも繋がり『宝』である」と講義を受け、産業能率大学皆川雅樹准教授からは問いづくりについて学んだ。生徒からの疑問は多様であるが、「なぜ〇〇か」や「どうして△△なのか」といった形式で作成させることで、本質的で単元を貫いた問いになりそうな内容も出てきた。これを生徒全体に還元することで、学びの筋道を与えるだけでなく、「いいなんゼミ」の活動にも繋がる問いづくりの練習にもなった。また、各HR教室にプロジェクターとスクリーンが配備されたため、ICTの活用で教員の集約時間の削減、プリント作成の省略や紙の削減にも繋がった。

7 Zoomを用いた他校とのオンライン交流

(1) 目的

本校生徒と同じような活動を行う他校の生徒と交流することで、相互に新たなアイデアや価値が創造できることを意図する。また交流の輪を繋げていくことで学びの視野を広げ、次への活動の活力とする。

(2) 内容

「いいなんゼミ」において活動を進めている生徒に対して、他校で同様の活動を行っている高校生と繋げる。そのために他校教員とのネットワークを使い、Zoomを使用して授業時間あるいは放課後に意見交流を行う。



(3) 検証

コロナ禍となってオンライン交流は加速し、今年度は県内外の高校生や経済産業省の若手官僚など、5回のオンライン交流を実施した。そこでの熱量の高い参加者同士の交流は、お互いを刺激し合うことに繋がった。そして、場所の制約を越えることで時間や費用の節約ができ、小規模校ゆえのデメリットも克服することができた。またこの活動については、『キャリアガイダンス』Vol. 440 (P. 32, 33) に取り上げられた。

8 まなボードを使用した新たな気づきを得る意見交換

(1) 目的

自らの考えを他者へ伝えることで、表現力や発信力を高める。また他者から価値観の異なった様々な意見を聴いて自らの意見と比較し、班での共有内容を他者へ説明することで新たな気づきや視点を獲得する。また、まなボードを使うことでリアルにコミュニケーションを取り、対面での活発な意見交換を行う。

(2) 内容

歴史の授業を進めていくと、なぜ過去のことを学ぶ必要があるのかと意欲が減退することがある。そこで新聞やニュースなど客観的な記事を示し、そこから得られた意味や同級生が感じたことを共有し、改めて歴史を学ぶ意味を考える。



「なぜ歴史を学ぶのか」について記事を読み、そこから共感できたことを黄色、疑問に思ったことをピンク色の付箋に1～3枚程度でまとめる。各班で時計回りに伝え合いながらまなボードに貼り、内容をグルーピングして見出しを付ける。まとめた内容について各班で確認した後、ワールドカフェ方式で意見交換を行う。授業最後に振り返りシートに記入して、自らの歴史を学ぶ意味についてまとめる。

(3) 検証

この活動を通して、どの教科にも共通する資料を読み取る力や意見を適切に表現する力を高めることができた。ワールドカフェ方式とすることで、自分の班に残る生徒はまとめた内容を説明する責任、他の班へ聴きに行く生徒は自分の班に戻って意見共有する責任が生まれ、活発に伝え合ったりメモを取ったりと学び合っていた。この活動で「より多くの人意見を聞けば聞くほど、自分では思いつかなかった疑問や考えが溢れた」と振り返りがあり、意見共有をする意味に気づくことができた。

全員が同じタブレットを所持している場合は、Jamboardを使うことも有効な手段である。ただ本校はその環境にまだ無いことと、今回は各班を渡り歩きながら対面で聴き取るコミュニケーションを目的とした。このことで即座に記載内容についてのやりとりがあり、活発な意見交換となった。

9 「トークフォークダンス」による地域住民との対話機会の創出

(1) 目的

高大連携授業等が出てきた地域に関する疑問や興味・関心について、地域の方との対話を通して新しい視点や価値観を発見する。そして交流を通して頼りになる地域の大人の存在を知り、繋がりをつくる。また、自分の考えをまとめ、適切に言葉で伝えながらコミュニケーション能力を向上する。

(2) 内容

高大連携授業「社会科学入門」で学んだ内容が本当に実社会で起きていることなのか、地域住民を授業に招いて対話を通して深めていった。当日の進行は以下の通りである。

8:30 ～ 8:50 地域住民へ本日のスケジュール・目的の確認等

(8:40 に授業開始のため、別室にてT T教員が生徒へ本日の目的を再説明)

8:50 ～ 9:05 開会・アイスブレイク

9:05 ～ 9:30 トークフォークダンス (前半) … 6問ずつ (1問1分)

9:30 ～ 9:40 休憩

9:40 ～ 10:10 トークフォークダンス (後半) … 6問ずつ (1問1分程度)

10:10 ～ 10:15 隣同士で振り返り…大人2人、生徒2人程度で意見交換

10:15 ～ 10:20 全体振り返り

10:20 ～ 10:25 閉会 (終了後、別室で地域住民同士の交流・振り返り)

アイスブレイクでは「連想拍手」を用い、対話しやすい場の雰囲気作りを心掛けた。そのこともありトークフォークダンス開始早々から対話は進み、白熱していく中で、イスを近づけて話に聞き入る姿が至るところで見られた。そして「1分では足りない!」という声が各地から上がり、後半では内容によって1分30秒～2分の時間を取り、双方に気づきのある時間を創出した。

(3) 検証

自分の意見を対面で伝えることが苦手な生徒が多いため、このような1対1で伝え合う活動がうまくいくか不安だった。しかし実際は、「自分が考えてきた質問をする時は時間が足りないくらい話せた」、「最初は緊張していたけど少しずつ緊張がなくなり、自分の意見をうまく言えるようになった」と、対話が進みコミュニケーション能力が向上していったことがわかった。そして、「自分の中でしか考えられなかった問題が、いろんな大人の方の意見を取り入れることで新しい考えが生まれた」、「地域の自然を使ってできそうなことを大人と一緒に考えてみたい」といった振り返りもあり、交流をすることで新たな気づきや繋がり、今後の意欲を持つことができた。



本校は今年度からコミュニティ・スクールとなり、より気軽に地域の方が学校へ入ることができる場を創っていく必要があると感じる。地域の方からは、「自分のスキルを活かして色々関わっていきたい」、「生徒と一緒に地域の未来を考える会を実施したい」など好意的な意見を多くいただき、今回のトークフォークダンスはその一つの契機になったのではないかと感じた。このような対話によって生徒と地域の方とが繋がり、今後何かしら協働していくためのアイデア出しや顔つなぎの場を授業時間内においても創出していければと考えている。

VIII 部活動での地域協働活動

1 ボランティア部

(1) 目的

校外活動を通して、様々な人との出会いや体験から、様々な発見や感動・喜びを感じ、自己の成長を図る。世代の異なる人との交流から、身なり・言語・行動等の礼儀を身に付ける。また、地域の方々とのふれあいを通して、それぞれの立場や思いを押し量り、相手を思いやる心を育み、地域貢献につなげる。

(2) 内容

	取組	内容
4月	とこわか国体カヌー競技リハーサル大会参加	検定補助員、式典表彰員、検事補助員、受付案内係、おもてなし係のボランティア
7月	クリーンキャンペーン	校内清掃（トイレ・窓・階段・玄関等）
8月	「ありがとう一行詩コンクール」作品応募	家族や友だち、地域の人、コロナ禍でもがんばる人への感謝・応援メッセージの作成
8月	ヤングミドナサポーターによる献血啓発活動	献血啓発メッセージの録音
10月	松阪市社会福祉協議会の方による講演会	「福祉」や「社協」、「赤い羽根共同募金」について学び、自分たちに出来ることを考える（グループワーク）
11月	キックオフイベント	本校周辺の沿道で、赤い羽根共同募金のPR活動
11月	文化祭	赤い羽根共同募金活動。羽毛回収ボックスの製作と回収。献血や募金、古切手回収の方法や活用例などの紹介
12月	松阪えきまえ楽市参加	赤い羽根共同募金に関する物品の販売及び募金活動
12月	松阪地域献血街頭ページェント	ショッピングセンターでの献血啓発活動（ティッシュ等の配布・献血依頼呼びかけ）
2月	花いっぱい運動	球根から花を育て、地域の施設・店舗等へプレゼント
年間	古切手回収	古切手回収及び、整理
年間	並木道清掃	本校の杉並木及びバス停等の枝・ゴミ拾い

(3) 検証

昨年度に引き続いてコロナ禍の影響により、様々なイベント・活動等が中止になり、ボランティア活動の変更を余儀なくされることが多数あった。本来なら定期的に参加予定の献血啓発活動なども、今年度は1回のみ活動となった。一方、校外活動が難しい状況の下、献血啓発メッセージの録音や校内での赤い羽根共同募金活動、花のプレゼントなど自分たちに出来ることを考え、これまでとは違ったボランティア活動を実施することができた。

今後は社会福祉協議会と連携し、継続的な取組として、地域の福祉活動に力を入れていきたいと考えている。コロナ禍だからこそ、試されるエンパワーメントを実践すべく、対話力・追究力・創造力・発信力を育成していきたい。

2 商業研究部 「いいなんキッズいきいきクラブ 夏休みプログラミング教室」

(1) 目的

学校で日頃学んでいる以上のことを学習し、自分の言葉で小学生に伝え教えることを体験することで自信をつけ、今後の活動をさらに充実したものにします。

(2) 内容

飯南地域振興局主催で夏休みに行われた、小学生対象の「いいなんキッズいきいきクラブ 夏休みプログラミング教室」に講師として参加する。小学1, 2年生は IchigoJam のうんちどりる、小学3, 4年生は HackforPlay、小学5, 6年生は IchigoJam の川下りゲームを勉強した。



(3) 検証

講師として教える準備として、参加した部員は2日間に渡り合計6時間ほど勉強会を行った。初めて触れるプログラミングということもあり、戸惑う部員もいた。自信をもって小学生に対応するためには詰め込みではなく、日々少しでもプログラミングに触れていくほうが本部員にとって良いと感じた。

3 吹奏楽部 「ハナノキ紅葉イブニングコンサート」

(1) 目的

活動の一つである定期演奏会を地域に開かれた催しとして行い、演奏により地域を盛り上げ、地域の方との交流を深める。また、「演奏者と観客」としての交流のみではなく、生徒自らが地域の方へ協力を依頼してともに場を創り上げる。

(2) 内容

今年度で6回目の開催となり、開催前には部員が作成した告知ポスターを飯南地域振興局へ持参し、広報依頼と当日準備等の打ち合わせを行った。また、飯高地域振興局や西部教育事務所へも協力を依頼した。開催当日の11月9日16時半からハナノキの下にコンサート会場を準備し、部員の司会進行のもとで4曲を披露した。

ボランティア部が検温・消毒といった感染症対策を行い、同窓生が湯茶の振る舞いをするなど、演奏の周囲でも多くの交流の輪が生まれた。観客席は30席を準備していたが、実際には100名ほどの来訪があった。

(3) 開催を終えて

当日、新聞社の取材に応じた部長は「部員10人が心を一つにして演奏できた。たくさんの人に聴いてもらえて私たちも楽しめました」と話し、盛況に終わったことへの感謝を述べた。紅葉に合わせての開催であるので、早い時期から告知が行えないことや、感染症対策の徹底などの面で課題も多いが、自分たちの活動を見ていただくとともに、地域の魅力をアピールする催しにすることができた。

4 美術部 「地域の宝 『茶』 を生かした芸術活動の探究」

(1) 目的

郷土の偉人で「製茶王」と呼ばれた大谷嘉兵衛の故郷は現在の飯高町であり、そのこともあって飯南・飯高地域の特産として、「茶」の存在はたいへん大きなものである。美術部は、その地域の特産であるお茶を芸術活動のなかに取り入れ、発信することで地域を盛り上げ、お茶の消費量拡大や観光客の増加、新しい業種の進出などに微力ながらも貢献したいという願いのもと日々活動している。

(2) 内容

①深蒸し緑茶ラテアートの体験教室

松阪市の伊勢中川駅の近くにある「みんなのカフェ」という店舗にて、7月と12月の2回、どちらも20名程度の参加者があり感染症対策を徹底して開催した。この開催には松阪市PTA連合会会長である鈴木寛子氏のご協力もあって、実現への運びとなった。この開催に向けて、テーマや企画、運営、準備物など、何が目的でどのように行うのか、オンライン会議で2回にわたり協議を重ねた。コロナ禍という状況のなかでも安心して飯南・飯高地域の特産である「お茶」を広めることはできないか、どういった方法があるのかなど、生徒が企画に対して考え構成していく過程に重点を置いて取り組んでいった。その話し合いの中で、コロナ禍ということもあり「販売」は難しいという結論となり、「体験教室」という形で開催することとなった。

体験教室の価格は500円、30～40分で3組限定（1組2名まで）とした。そしてラテアートとともにカフェに作成を依頼したお茶ケーキの提供も行い、お茶のPRを兼ねた体験教室を開催した。7月に開催した1回目は初めてということもあり、生徒たちはお客様への対応などを通して大きく成長することができた。そして後日、鈴木氏にご来校いただいて当日の振り返りを行い、第三者側として気づいた点などを生徒へご指摘いただいた。その結果、生徒たちはこの活動を通してたくさんの発見をすることとなった。

7月の運営は2、3年生5名での開催となったが、2回目となった12月の開催にあたっては、1、2年生8名での運営となった。ここでも鈴木氏とのオンライン会議で運営についての話し合いを行い、当日の開催へと繋げることができた。価格や時間帯などは前回と同じ内容で行い、今回も終了後に反省会を実施して鈴木氏からも指導・助言をいただいた。この2回にわたる体験教室の開催・運営によって、生徒たちの大きな成長へとつながった。



②茶畑アート

地元の製茶会社「深緑茶房」との協働プロジェクトとして、茶畑の刈り込み作業にて、機械の刈り込み方向で発生する色の変化を利用した「茶畑アート」を全国初の試みとして行った。道の駅「茶倉駅」にある高台から見下ろせる場所にある茶畑（縦100m×横200m）へ、「I I N A N 茶」というロゴを表現した。地元の雄大な景色とともに、地元の特産である「お茶」も認識していただき、地元や観光客から愛される場所となることを願って作成した。

時期は10月の最後の刈り込み作業となる「晩茶収穫」の時期とした。事前に格子状の区画を作成するため、2回現地での下準備作業を行った。縦には26列（①～⑳）の畝を利用し、横11カ所（A～J）に約10m間隔で杭を打ち、カラーのビニールテープを横200mに張った。当日は、生徒が色の変化する場所に旗を持って畝の横に立ち、刈り込み作業を行う運転手に旗の上げ下げにて場所を知らせ、色の変化をつけるという大変な作業に挑んだ。その結果、雄大な景色の中にある茶畑に、「I I N A N 茶」の文字をきれいに浮かび上がらせることに成功した。



	①	②	③	④	⑤
A					
B					
C					
D					
E					
F					
G					
H					
I					
J					

（3）検証

①「深蒸し緑茶ラテアートの体験教室」においては、お子様連れでの参加者が多く、コロナ禍で外出などが難しいなか、特別な経験ができたという貴重なご意見をいただくことができた。また、地元の中学校や社会福祉協議会などとも協力し、小規模ではあるもののイベントを開催できたことは、今後につながる大きな普及活動の第一歩となった。今後は社会状況を判断しながら規模を大きくしていくこと、目的に掲げた数々の「評価」を実施することも重要である。

②「茶畑アート」においては、初めての試みということもあり、本来は「絵」を表現したかったものの今回は「文字」で行うこととなった。アートを表現するためには、茶畑を格子状に区分けをし、変化をつける場所の位置づけをとる作業が大変である。そのため絵の表現となると、色の変化場所が文字の場合の数倍以上になることが予測されるため、どのくらいの表現ができるのかは現段階で未知数である。

今回の活動だけでは目的達成にはまだまだだが、0から1という大きな一歩を踏み出すことができた。目的達成に向けた「種まき」を終えた状態であるため、今後はその種を成長させ、規模や内容の拡充に従事していきたい。